

第 24 回世界哲学会議参加報告

——子どもの哲学（P4C）関連のセッションを中心として

A Report on the 24th World Congress of Philosophy
from the Viewpoint of Philosophy for Children

堀越耀介（東京大学大学院教育学研究科）

1 はじめに

本報告は、2018年8月13日から8月20日にかけて中国・北京の China National Convention Center にて行われた、第24回世界哲学会議（World Congress of Philosophy）における、「子どもの哲学（Philosophy for Children:P4C）」関連の諸セッションで行われた理論研究及び実践発表を簡潔に報告するものである。本報告は、そこで行われた P4C にかんする諸発表について網羅的、詳細に記述しようとするものではなく、あくまで執筆者の関心や研究内容の観点から選択・再構成したものであることをはじめに記しておきたい。

2 世界哲学会議

世界哲学会議は、1900年のフランス・パリにおける第一回大会を皮切りに、5年に一度開催され、今回で24回目を迎える世界的規模の哲学研究大会である。グローバルな諸問題にかんする哲学的知識にフォーカスすること、哲学的な教育活動を促進すること、すべての国の哲学者の間に研究推進のための関係を構築することなどがその理念とされている。

第24回大会は、「人間」という存在の様々な側面、そして「人間性」が直面している様々な困難について探究するという意味を込め、“Learning to be human”をテーマに開催された。世界120以上の国々から6000名を超える研究者、院生、学校教員が集まり、プレナリー・セッション、シンポジウム、ラウンドテーブル、スチューデント・セッションをはじめ、著名な哲学研究者によるレクチャーや映画上映会なども行われた。その数は一日あたり100件をゆうに超え、テーマも想像できる限りすべてとっていいほど非常に多岐に渡っていた。

哲学プラクティス関連のテーマも決して少なくなく、「哲学カウンセリング」、「哲学セラピー」などのセッションも設けられていた。特に「子どもの哲学（P4C）」はいずれのセッションも非常に盛況・満席で、各会場30～50名の参加があり、一日平均2～3件のセッション、一件につき5～6人の発表が組まれていた。また、欧米諸国からの実践報告・研究発表のみならず、東アジアをはじめとして、中南米、東南アジア、中東の国々からも独自の文脈や問題状況を踏まえた発信がみられた点は、大変興味を惹くものだった。印象論に過ぎないが、こうした諸発表が、しばしば伝統的なスタイルで行われた教育哲学や政治哲学にかんするセッションよりも関心を集めていたという点は、いささか意外でもあり、同時にそのムーブメントとしての潜在性が高く評価されていることを強く意識する契機となった。

3 子どもの哲学 (P4C)

研究発表の実質的な初日である 8 月 14 日のセッションで大変注目されたのは、カナダの哲学者、A. Wolf, S. Gardner 両氏 (Vancouver Institute of Philosophy for Children) による「哲学キャンプ」の実践発表である。彼らは大学を拠点として、6～13 歳までの子供たちを対象に 5 日間にわたるキャンプを定期的に行っており、単に P4C の実践を行うだけでなく、子どもたちが哲学探究や探究の共同体づくりに「たどり着く前までの過程」を非常に丁寧に構築しようとしていた。たとえば、何よりもまず「キャンプは楽しいものでなくてはならない」という信念から、子どもに自然の中で、あるいは遊具や音楽などを通して遊ぶという自由な活動の中から問いを見つけてきてもらうこと、そして、その楽しさこそが探究の共同体の紐帯となること、それによって活動と思考を結びつけることなどが注意深く考慮されていた。また、子どもが自分と年齢の近い若者に、より密接に結びつくという性質を鑑み、スタッフを比較的若い方々にすることによって、「探究は重要なんだ」という意識を子どもにより強く自覚させる工夫などが凝らされていたのが印象的であった。

こうした彼らの実践は、理論的な前提のもとに成り立っていることもしっかりと示されていた。たとえば、「勇敢であるとはどういうことか」という問いは、文脈を考慮することなしには無意味であり、文脈という観点から本質的に価値のある概念として動機づけられるべきであること、そしてその概念の使用は、公共空間において推論される必要があると理解すること、それが他の代替案にも開かれているということを知ること——これらが、子どもたちが P4C を通して「概念的に考える能力を身につけること」であると結論付けられていた。

8 月 15 日の P4C セッションは、メキシコの哲学プラクティショナーである D. Sumiacher 氏の理論研究から始まった。M. Lipman の著書 *Thinking in Education* においては、「批判的思考」、「創造的思考」、「ケア的思考」の三つが P4C において涵養される思考であるとされているが、彼は、「批判的思考」と「創造的思考」の関係性について次のような問題提起を行った。たとえば、私たちが「批判的に」考えようとする、現実的に、記憶を頼りに、具体的なものから、真理に向かって、反復して、固定的に、その意義について考えなければならない。他方で「創造的に」考えるときには、創造的に、新しいものを、可能性から、想像力を駆使して、オリジナルに、動的に、楽しく考えることになる。この二つの思考は互いに相反することがあり、いわば二つの極を形成しているのではないだろうか。このことをどのように理解すべきなのだろうかというのが彼の問題提起である。彼の結論は、結局のところ P4C においてどちらを突き詰めて考えることが適切であるかは、議論の進み具合によってその都度選択されるべきであり、時にはその二つの極を行ったり来たりしながら考えることで、より生産的な思考が可能となるというものだった。こうした見解から、彼は「思考」には以上のような三つの「側面」があるとはいえるが、「三つの(別々の)思考」があるとも読めるような Lipman の立場には反対する立場を取ることで、自らのオリジナリティを示した。

次に、ロシアで人類学を研究している E. Trushkina 氏 (Russian State University for the Humanities) は、ロシアで自らが行っている哲学キャンプの試みについて報告した。キャンプには 3 日間の比較的短いものと、10 日間の長期に渡るものが用意されており、主に Lipman の理論に基づいて実践されているという。子どもたちは 8-12 歳のグループ、13-16 歳のグループに分かれ、保護者とともに参加する。テーマは、美や愛、平和、人間といった抽象的

なものも多いが、哲学のレクチャーや水泳、木登りといった様々なアクティビティ、時には科学者との対話も交えながら議論することだった。前日の発表にあったカナダのキャンプ同様、その活動は哲学的対話にとどまらず、子どもたちが楽しそうに遊ぶ様子や身体性に重きが置かれている点が非常に印象的で、一見スライドの写真を見ただけでは、P4Cに関連する活動とは到底想像がつかないところに少しばかり驚かされた。

8月17日のセッションは、東アジアで積極的なP4Cの活動を行ってきた韓国のJ. Park氏 (Gyeongsang National University) の研究報告に始まった。彼は、P4Cを「自己構築のペダゴジー」として位置づける。それは、教え込み型の教育手法とは異なり、哲学的対話によって他者や教師との実存的な出会いを可能にし、自己を構築させる教育であるという意味だとされた。P4Cの中にこうした実存的な機能、理論的基礎を見出す研究は同日のA. Kizel氏 (University of Haifa) が同様の文脈でレヴィナスの「他者性」概念や「応答責任」概念を持ち出していた点にみられるだけでなく、ドイツのB. Saal氏 (8月15日)、C. Espano氏 (8月14日) が共にアレントの「活動」概念を持ち出して、P4Cにおいて行われる哲学的対話には、子どもが世界の「新参者」として新たな「はじまり」を世界に創設する機能があると指摘し、その意味で対話の空間は、お互いを現しあう「現われの空間」でもあり、同時に「政治的な」空間であることも指摘された。

他方で、こうした理論研究と対照的だったのは、中国で教育学を専門としているL. Leng氏 (Jinan University) によるもので、彼女はハワイ式P4Cの理論と実践を紹介し、それが何よりも「知的安全性」という理念の下で行われるべきことを強調した。そして、それが確保されるための状況づくりや、文化的な習慣等を教育学的な視点から、ハワイに5年間滞在し研究したバックグラウンドをもとに話された。この日は他にも、P4Cを様々な仕方で「親しみやすいもの」にしようとする実践が数多く紹介された。

たとえばロシアの哲学研究者であるL. Retyunskikh氏 (Moscow State University) は、「人生で一番幸せな時はどんな時」という問いについて参加者全員が一言ずつ答えていき、最も素晴らしい例を挙げられた人に景品が与えられるゲームをその場で実施してみせたほか、「ゲーム・ベースの哲学探究」考案者で、カナダのG. Ghanotakis氏 (Institut-Philos) は、独自に開発された10を超える「哲学ゲーム」(ボードゲームやカードゲームのようなもの) を紹介するなど、終始和やかなムードでセッションが進められたのも大変印象的であった。

以上の実践・研究報告は、P4Cの「手法」における多様性という意味で大変興味深かったが、それ以上にP4Cが行われる「文脈」の多様性も注目に値し、自国の様々な問題状況の解決とP4Cの実践を強く結びつけている実践者の発表も目立った。

例えばイランでP4Cの普及活動を行っているF. Shahrtash氏 (8月15日、Gyeongsang National University) は、アラブ世界の非常に強い伝統的規範が根付く状況で、他方では、様々な批判的思考の教育の手法も入ってきており、P4Cも一部ではカリキュラムに入っていると語り、抑圧的な文化・政治状況への対抗という切実さから、自身の実践を紹介した。

また、メキシコの哲学研究者であるY. Angulo氏 (8月17日、National Autonomous University of Mexico) は、メキシコの犯罪率の高さ、ドラッグ取引の蔓延、警察・軍による汚職、モラルハザードといった人道危機的状况を説明した。そのような状況下では、教育の力が何よりも不可欠であるとし、教師教育の中に「哲学セラピー」を導入することによって、教師が生

徒の自己構築を道徳的に導き、スピリチュアルな仕方でも世話をすること、彼らの存在をつくりあげること、その魂を導くことが理想であると主張した。

こうした「哲学セラピー」の理論的基礎として、固定的な人間本性を措定しないこと、あくまで個々人が自分の生の中で自分の存在を築いていくこと、その人のすべての行為が人格の一部を構成していること、などといった諸前提がおかれている点は大変興味深かった。他方で、やはり諸個人を「道徳的・倫理的な主体」にするといった言葉がやや曖昧なまま多用されていただけでなく、多くの場合、古代ギリシア哲学における徳目や、キケロ、セネカ、マルクス・アウレリウスといった論者の思想が前提とされていた。その意味では、「魂を導く」といった術語がいささか安易な仕方で使用されていたこと、そして諸個人をいわば「白紙」ととらえるという理論的基礎とそれらとの齟齬については、懐疑的な部分も残った。

こうした実践と対照的に見えたのは、伝統的な教え込みの教育によるのではなく、平和構築の手法として P4C を捉えようとしているフィリピンの P. Elicor 氏（8月17日、Ateneo de Davao University）であった。彼は、平和という規範を一方向的に押し付けるのではなく、P4C の手法によって「ゼロから」構築する実践を紹介していた。特に印象的だったのは、学校文化的、社会的に周縁化された子どもたちと、こうした実践を行っている彼の姿勢でもあった。

4 東アジアにおける哲学教育

こうした文脈と呼応するかのように、8月19日には「東アジアにおける哲学教育」のセッションが催された。セッションをオーガナイズした日本の寺田俊郎氏（上智大学）は、特に東アジア地域及び世界における平和構築という観点から、哲学教育の役割について探究することをその目的に据えた。その上で、中国（及び香港）、韓国、日本、台湾の研究者らによって、P4C にとどまらず各国の一般的な哲学教育事情や実践報告、問題提起が行われた。

まず中国の哲学研究者である Y. Jiang 氏（Beijing Normal University）は、中国の哲学教育において教えられているのは、高等学校を例にとってみても、ほとんど全てがマルクス主義哲学であると述べ、それが批判や懐疑といった能力を涵養する方向性から発展させられる必要があることを指摘した。そのためには、哲学史や教育思想を教えこむのではなく、「哲学すること」を学ぶような教育にシフトする必要があると主張した。

次に、哲学教育を専門にしている韓国の J. A. Lee 氏（Ewha Womans University）も、自国での大学入学以前の哲学教育について説明し、子どもに対話的な仕方でも哲学することを教えることの重要性を説き、特に哲学することが適切な「教材」の使用によって導入されるべきであることを強調した。彼女は、東アジアの哲学教育においては、Lipman の作成したような一連の小説からなる教材ではなく、「よりアジア的な」文脈に適した教材開発に非常に熱心に取り組んでおり、韓国でも非常にポピュラーだというアニメ「クレヨンしんちゃん」等を題材とした教材を既に何冊も出版していた。こうした教材をもとに、何よりもまず子ども自身が自分の問いを見つけることが第一段階であるとされ、この段階を踏んではじめて、第二段階として「探究の共同体」における哲学的な対話活動が想定される。そして第三段階として、対話だけに終わるのではなく、一人でする「自己内反省」という営みもしっかりとプログラムに組み入れられている点が大変印象的であった。

以上の二人が、哲学することを教えるべきと主張する一方で、ややアジア的な文化・文脈

の重視、時には特定の徳目という観点から話されたのに対して、寺田氏は「人間性と判断能力を涵養する一手法としての哲学」という視点から、哲学教育を捉えた。そして、彼は特にカントの世界市民的な哲学を理論的基礎として、哲学教育の理念を説明した。それは第一に「自分で考えること」であり、第二に「他者とのコミュニケーションの中で考えること」であり、第三に「常に自分自身に矛盾なく考えること」であるとされた。寺田氏は、東アジアの平和・哲学教育という文脈においても、自身のカント主義的で普遍主義的な見解から、まずは「自分で考えること」を中心に置く世界市民像を構想されたのが非常に印象深かった。

各国研究者からの報告後には、香港の哲学研究者である S. Pamquist 氏 (Hong Kong Baptist University) によるコメントが述べられたほか、司会の河野哲也氏 (立教大学) のもと、フロアとの活発な議論も行われ、非常に多岐に渡るテーマが議論された。

たとえば、アカデミックな哲学とそうでない哲学は、哲学教育の中でどのように架橋され、互いに相互作用することが可能となるのか、また、特定の文脈において哲学することと、普遍的な思考において哲学することの関係とはどのようなものかといった議論が交わされた。

中でも特段興味を引いたのは、前半の報告で頻繁に多用された「哲学すること」とはそもそも何であるかをめぐる議論と、デモクラシーと哲学はどのように架橋されうるかをめぐる議論であった。前者について、たとえば Pamquist 氏は、それが一つには「自己定義としての哲学」として定式化可能であるとし、哲学史や思想家について解釈する哲学とは区別して、「私たちは何をしているのか」、「私たちは誰なのか」について問い、考え続けることが、すべての人にとっての「哲学すること」なのではないかと提起した。

後者について、特に寺田氏は、政治的な議論や意思決定にも哲学的な議論が資する可能性、その連続性に言及した。通常、哲学的な議論は政治的な議論の中で骨抜きにされていることが多い。しかしながら、哲学的な段階を踏むことで、政治的な議論の基礎を形成したり、その両者の間を行き来することで、有用な観点を組み入れることができるだけでなく、政治的な議論や意思決定をする際の思考力の涵養にもなりうるのではないかと提起された。

5 おわりに

最後に、筆者の所感を少しだけ書き残し、本報告の締めくくりとしたい。本大会は、世界規模での研究大会であると同時に、研究者同士の交流会・祭典といった色合いも強く、緊張した雰囲気や形式ばった感じのしない、極めてフランクなセッションも多かったように思う。その意味では、全体を通して比較的参加しやすい感覚を持った一方で、発表や報告の質に多少疑問の残るものもあれば、突然の登壇者欠席やセッション消滅等もかなり頻繁に生じていた。加えて、過剰な警備体制や会場の変更、大会事務局の粗雑さに戸惑ったところもあり、国際学会の参加に慣れていない者としては、やや適応力を要求されるものでもあった。

また興味深いことに、P4C のセッションのほぼすべてが、ナショナル・コンベンション・センター地下展示会場の、天井なし仮設プレハブ特設会場^④で行われた。開催場所決定の経緯は定かではないが、やや追いやられた感のあるところで、他のプレハブにも隣接しているために、いわゆる学会の会場としてはやや騒がしいだけでなく、天井が抜けていて非常に高く、若干奇異な感じのする会場であった。しかしながら、それが不思議な開放感と安心感、ある種の連帯感を醸成するのに一役買ったところもあり、そのことをネタにしつつ、各回が

終始和気あいあいとした雰囲気の中で進行されたのが印象的でもあった。そうした中、筆者も何人かの研究者と交流し、自らの研究のモチベーションを新たにすることができた。

P4Cをはじめとした哲学教育の世界的動向は、各国が様々な困難に直面しつつも、全体としては総じて前向きで明るい印象を受け、特に各国が哲学を「教育」という文脈に位置付けようとする類まれな努力と創意工夫には驚嘆さえ覚えた。こうした状況の中で、本邦にも多様な哲学教育の実践が存在していることを鑑みれば、日本からの実践・理論両面での発信はやや少ない感もあり、そのプレゼンスを広げていく必要性を強く感じた。次回大会の東京招致は残念ながら実現しなかったものの、次回大会で本邦の哲学プラクティスの理論・実践について発信する余地は十分に残されている。今回の経験をもとに、次回大会では筆者自身も発表を行うことをここに強く決意し、本報告を締めくくりたい。